
三ツ星小5年1組での出来事～夏季学園編～

ざらめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三ツ星小5年1組での出来事〜夏季学園編〜

【Nコード】

N9150N

【作者名】

ざらめ

【あらすじ】

主人公、優太は、夏季学園1日目の夜、女子の話を聞いた。

>えっ！俺の好きな女子がいる？誰だろう？<

夏季学園1日目夜

「はぁ・・・。」

優太は、ため息をつきながら、清原高原学園の廊下を歩いていった。なんで夏季学園の一日目に眠れなくて宿舎徘徊しなきゃいけないんだよ。心の中で半ば自分に苛つきながら歩いていると、女子の部屋から、こんな声が聞こえてきた。

「・・・ちゃんって優太の事好きなんだよね。」

「えっ、マジ?! あの子そんなにかわいいわけでもないし、優しくもないから、多分ふられるんじゃない?」

「それに、優太は頭いいのに、あの子はね。」

優太は、自分の話題だと思って気になったので、しばらくそこにとどまることにした。

夏季学園1日目夜&1t・続> ; (前書き)

優太は、女子の話を、息を殺して聞いている。

夏季学園 1日目夜 & 1t : 続 & gt ;

「そういえば、優太が樹のこと好きって聞いたことがあるけど。」

「ウソ、マジ!？」

「もしかして樹、嬉しいの？」

「やだ、そんなわけないじゃん。」

なに勝手な事言っただよ!俺がすきなのは、しのぶなんだよ!

優太は、女子の部屋に怒鳴り込んでやりたい気分だった。

部屋に戻ってから、優太は考えた。

そういえば、・・・ちゃんって誰なんだろう?「あの子」って言うてたから、あそこにいた、星野ひかり:5-1の歌姫、松川千夏:5-1のファッションリーダー、二宮樹:文武両道、大賀桃:器用な人気者、あと、低い声も聞こえたから、あれはきつと、林琴葉:SとM、両方の性格を兼ね備えている、笹本しのぶ:鉄棒が得意、は違うな。だとすると、しのぶは違うんだ。残念だなあ。で、残り、市原明:内気、羽賀奏音:天才ヴァイオリニスト、今池佳乃:才色兼備、蒼井あざみ:ちよつとした不思議ちゃん、日野和香:遅刻魔、古田晶:天衣無縫、磯田七海:とても明るい、だ。いったいこの中の誰なんだろう?

考えている間に、優太は眠ってしまっていた。

夏季学園2日目朝（前書き）

優太は、鳥の声で目を覚ました。

夏季学園2日目朝

「ふぁ。」

優太は午前4時23分、鳥の声で目を覚ました。部屋を見渡すと、他の男子はまだみんな眠っていた。

また宿舎徘徊でもするか。優太が部屋を出ようとしたその時、ガシッ。誰かに足首をつかまれた。みると、西園寺司：文武両道、が、ニヤニヤしながら優太の足首をつかんでいた。横では、秋原貴：歯科医の息子、も、同じようにニヤニヤしていた。

「どこ行くの。」

「起きちゃったから、宿舎徘徊。一緒に行く？」

「もちろん！」

夏季学園2日目朝（後書き）

この小説は、フィクションです。実際の団体名や人名とは、一切関係ありません。

夏季学園2日目朝&1t:続>;(前書き)

優太は、貴、司と共に宿舎徘徊をしている。

「そういえばさあ。」

初めに口を開いたのは司だった。

「俺が昨日の夜、トイレに行こうとしたら、女子達がなんか話しててさあ。聞いてたら、どうもコイバナらしくて、市原はレイ君（梅田レイ：ガキ大将）が好きとか、羽賀は中君（中聡麻：ハンサム、足が速い。）が好きらしいよあ。とか言ってた。ったく、夜中までくだんねえ話してるよな。」

「そうそう、先生にも怒られてたし。」

2人とも女子の話の事知ってるみたいだし、「・・・ちゃん」の事、話してみよう。

優太は、2人に昨夜の一部始終を話した。

「ふん。それは気になるね。」

「で、優太たちは誰がいいの？」

「そんなのいないけど。」

「ほんとに？」

「ホントだよ。」

そんな話をしながら、3人は先生に見つかる事もなく、無事に（？）部屋へと戻った。

その後、優太は、2人から集めた情報を、整理した。

どうやら、羽賀、市原、古田、磯田は違うらしい。だとすると、候補は・・・。考えていたら、先生の声が聞こえた。

「起きろー！」

夏季学園2日目朝&1t・続> ; (後書き)

この小説は、フィクションです。実際の団体名や人名とは一切関係ありません。

夏季学園2日目昼

疲れた。

優太は、碧霧山の中腹の休憩所で、心の底からそう思っていた。

「ちよつとー！男のくせに、何へばってんのー！」

顔を上げるとあざみが、南っち（南恵太：食いしん坊キャラ）に喝を入れていた。

優太は、あの体型じゃしょうがないと思ったが、あざみに体力があることに感心した。

「ちよつとー！宗君！」

騒ぎ声も聞こえるが、あれはきつと、青木っち（そっくりな弟がいる）や石神井（石神井壮也：動物好き）、タツツー（藤森竜太：絵心あり）、宗君（宮崎宗也：人気者）だ。そんな事を考えていたら、目の前に、誰かが来た。顔を上げると、あざみだった。

「あゝ！ここにも雑食系ヘタレ組男子がいるー！」

「そんなんじゃないよ。」

「じゃあ、もしかして、樹が司とか貴とか誠（飯島誠：真面目）と話してるから、妬いてるの？」

「んなわけねえだろー！」

俺はその場から離れた。すると、ひかりちゃん達が近づいてきた。だが、

「ねえ優太！今日ちよつとしたサプライズがあるから、ヨロシク！」
と言うと、笑いながら行ってしまった。

俺がポカンとしていると、先生の、

「出発するぞー！」

という声が聞こえてきた。

夏季学園2日目昼&1t・続>t; (前書き)

優太達は、碧霧山に登っている。

俺たちの担任、石神井先生（石神井清比古：あだ名はピヨヒコ）は、若い。少なくとも、子供への対応の仕方は。まあ、見た目がもう少し大人びて（？）見えるということだ。熱意はにじみ出ているし、生徒ウケはわりと良い。みんな、友達のように接している。そんな先生と生徒が山登りをすると・・・

「センサー、疲れた。」

「足イテー！」

「もーヤメヨー！」

そんな声が聞こえることは言うまでもない。でも、黙々と登っている人もちゃんとして、その真剣な顔は、少し怖くもあった。そんな事を考えていたら、

「あつ！危ない！」

という声が聞こえた。が、気付いた時には遅かった。俺は木の根につまづいて、また別の木の根に小気味良い音をたてて頭をぶつけていた。

「いったー！」

俺が頭をさすっていると、佳乃が近づいてきた。

「優太！大丈夫？」

心配そうに言った佳乃は、頭をさすってくれた。俺はちょっと照れくさくなった。すると、レイ君も近づいて来て、

「大丈夫か？」

と言ってくれた。俺は意外だったので、

「えっ？うん。」

という反応をしてしまった。

「あれっ？もしかして邪魔しちゃった？ごめん！お2人でごゆるりどうぞ！」

レイ君は、そそくさと去って行った。

「そんなんじゃないよお。」
俺は反応したが、佳乃は、何も言わずに、うつむいていた。

夏季学園2日目昼&1t・続&8t・? (前書き)

優太達は、碧霧山の頂上へ到達した。

夏季学園 2日目昼 & 1t・続 & gt ; ; ?

「うわゝ！」

優太は頂上からの景色を見て、思わず声をあげてしまった。下には、優太達が泊まっている清原高原学園が見え、その手前や奥の青々とした山々に山の名前になった、碧い霧が薄くかかっている、幻想的な雰囲気を感じ出していた。他の人達の歓声の中、

「ちよつと、優太、来て。」

という声が聞こえた。辺りを見回すと、岩陰から、あざみが呼んでいた。もしかして、サプライズ？なんて考えながら行くと、しのぶがいた。そして、あざみはしのぶになにか囁くと言った。あれ？と思っていると、しのぶが言った。

「ねえ、優太、あたし、あんたのこと・・・スキ！」

「えっ？それって、あざみじゃないの？」

俺は、口に出してしまってから、後悔した。

「それって、あざみの方が、よかつたってこと？」

気まずい空気が流れた。俺は、思わず走り出していた。

ひかりちゃんや樹の

「うまく行った？」

という声が、途中で聞こえた気がした。

夏季学園2日目夜（前書き）

優太は、1日目の夜のように、
宿舎徘徊をしている。

夏季学園2日目夜

「はあ。」

優太はつくづく、自分に嫌気がさしていた。

「なんであんなこと言っちゃったんだろう？ つーか、告られたのに、逃げたし。」

そんな事を考えて歩いていたら、いつの間にかまた、女子の部屋の前に来ていた。すると、また、女子達の話し声が聞こえてきたので、優太はまた聞いていようと思い、その場にしゃがんだ。ところが、身を持ち出して女子の話を聞こうとしたら・・・。優太は、バランスを失い、前のめりに倒れてしまった！しかも不運なことに、優太は声をあげてしまったのだ！

女子達はその声を聞きつけたようで、ざわざわと声が出た後、誰かが出て来た。それは、しのぶだった。

「あつ！優太！」

しのぶが声をあげると、部屋の中からも声がした。

「えっ？優太？」

「よかった。先生じゃなかったんだ。」
するとしのぶは、声をひそめて言った。

「ねえ優太！なんで今日逃げたりしたの？」

「だって俺、あんなこと言っちゃって……。」

「じゃあ、なんであんなこと言ったの？」

「だって、俺を好きなのは、お前じゃないと思ったんだよ！！！！！！」

「……………」

「どういう意味？」

俺は、一部始終を話した。

「優太、それ、間違ってる！昨日は私、コイバナに参加してないもん！」

「それ多分、私だと思う。」

声のした方を見ると、それは、あざみだった。

「全部聞いてたの。私、先生に聞かれないように、声を低く、押し殺してしゃべってたから、しのぶみたいに声が低く聞こえたんじゃない？」

そしてあざみは、あっけらかんとしている俺たちを見て言った。

「まあ、後は2人で解決して。」

すると、しのぶが言った。

「で、優太！理由ってホントにさっき言った事だけ？」

「そうだけど・・・こういう意味だよ！」

「だって・・・。優太、もしかして、ホントにあざみの事好きなのかな。って思ってたんだもん！」

しのぶは、泣きそうになっていた。

「そんな事ないって。俺はしのぶが好きだって言っただろ？」

「言っていないよ・・・。」

「えっ？」

「そんな事、一言も言っていないよ！」

しのぶはとうとう、泣き出してしまった。

「じゃあ今、俺が言っつて、いや、叫んでやるよ！」

俺は腹の底から叫んだ。

「俺、岩木優太は、笹本しのぶが、好きだ――――――――――」

「――――！！」

夏季学園3日目朝

俺はあの後、ピヨヒコにこっぴどく叱られた（ピヨヒコの「こっぴどく」はねちねちと話し合うと言うことだ）。でも、お説教の最後に、意外な事を言われた。

「お前がやった事は、もちろんいけない事だ。でもな、」

ピヨヒコは少し声をひそめた。

「好きな女ができて、あんな風に告白したら、大切にしてくれよ。それが男だ。」

そして、サツサと行ってしまった。多分俺はあの時、とてもマヌケな表情をしていたと思う。口をポカンと開けて、目をまんまるくして、きつと誰もが、見たら吹き出してしまうような顔だっただろう。でも、俺はそれほど驚いた。あのピヨヒコの口から、あんな言葉が出たなんて！みんなには話したかったが、ピヨヒコが恥ずかしがるだろうと思い、辞めておいた……。

「何ボーツとしてんだよ！」

「うわっ！」

爽（竹内爽：スポーツマン）がいきなり話しかけてきたので、俺は声をあげてしまった。

「もしかして、しのぶの事考えてたのかよ！」

「えっ！そ、そういうわけじゃ……。」

「いやいや、そういうわけなんだろう？」

「別に誰もそんな事……。」

「静かにして下さい。」

俺の必死の否定は、先生の声にかき消された。

夏季学園3日目昼

「ありがとうございます。」

俺はやる気なく清原学園から三ツ星小までのバスの運転手さんにお礼を言い、バスを降りた。

「並べ。」

同じくやる気のない先生の声で、長い長い帰校式が始まった。俺はその間ずっとボンヤリしていて、終わってからもしばらくその場に突っ立っていた。

「ユウター！」

いきなり話しかけてきたのはしのぶだった。

「えっ？あっ……。何？」

俺はちよつとどぎまぎした。

「昨日の夜の事なんだけどさあ。」

俺は頬が熱くなっていくのを感じた。

「で、何？」

「あたしたち、両思いつて事だね。」

「まあ、そういうことだな。」

「それってさ、付き合ってもいいってことだね。」

「ウン。」

「あたしたちさ、付き合ってみない？」

「え？」

俺が動揺していると、後ろから声が聞こえた。

「ユウターち！」

振り向くと、それは南っちとヒー君（秋本博：イジラレキャラ）だった。

「もしかして、今の話聞いてた？」

おそろおそろ聞くと、南っちは笑顔で答えた。

「大丈夫！2人が付き合うつて辺りしか聞いてなかったし、ちゃ

んと言いつらしてあげるから！」

そして大きく息を吸い込むと叫び始めた（優太は、こういう時には大きなお腹は便利かもしれないと思った）。

「みんな〜！優太っちとしのぶって、付き合い……。」

「しのぶ、逃げるぞ！」

俺はしのぶの手をつかんで走り出した。しのぶの顔が赤くなっているのが、横目に見えた……。

こうして、しのぶとの恋愛が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9150n/>

三ツ星小5年1組での出来事～夏季学園編～

2011年10月8日01時24分発行